

オーセンティシティと地域イベント—鹿児島を事例に

定藤 博子*

1 はじめに

平成30年度より、鹿児島国際大学附置地域総合研究所では「鹿児島を支える経済・福祉・文化に関する研究」という総合テーマの下、計6名の所員が研究を進めてきた。その中で筆者は「歴史から考える鹿児島のマネジメント」を個別研究テーマに掲げ、調査・研究を行った。

本研究では特にオーセンティシティの獲得と喪失について鹿児島の地域イベントを事例に調査を進めた。具体的には、霧島国際音楽祭については文献研究を中心に進め、薩摩川内市の入来麓武家屋敷群では文献研究のほかフィールドワークを行った。

霧島国際音楽祭¹のようにオーセンティシティの獲得に成功したケースもあれば、オーセンティシティがあったにもかかわらず人口減少に伴いオーセンティシティを喪失したケースも存在する。本稿では、地域イベントが鹿児島の経済、文化活動をいかに支えるのか、その可能性について報告したい。

本稿の構成は以下のとおりである。「1 はじめに」では本稿の目的を明らかにした。「2 大学と地域イベントの関わり方」では、霧島国際音楽祭と鹿児島国際大学を事例に考察を行った。「3 大学生と地域イベントの関わり方」では、入来麓武家屋敷群でのフィールドワーク及び大学生からの提案を紹介する。「4 まとめにかえて」では今後の可能性を述べる。最後に「5 謝辞」とした。

2 大学と地域イベントの関わり方

①霧島国際音楽祭と発起人野村三郎氏

霧島国際音楽祭は1980年に始まった夏季音楽祭である。提唱者はドイツ人ヴァイオリニストのゲルハルト・ボッセ氏、鹿児島短期大学教員の野村三郎氏、霧島国際音楽祭鹿児島友の会現会長である古木圭介氏であった。ボッセ氏の音楽教育への思い、野村氏の出身地鹿児島の文化レベル向上への思い、そして、音楽祭の文化的魅力を感じ、鹿児島の経済を支える観光コンテンツとしての可能性を見抜いた古木氏の先見性によって、当音楽祭は誕生したのである。その後、産官民がそれぞれに役割を果たしながら、今年2020年に41回目を迎えるまでに成長した。成長の過程とオーセンティシティの獲得については、拙稿（2019）を参照されたい。

1967年（昭和42年）4月、鹿児島短期大学が創設されたとき、野村氏は講師で、担当講座は現代思想であった²。野村氏は1933年に鹿児島県に誕生、鹿児島県立鶴丸高校、早稲田大学文学部哲学科に進学、音

キーワード：オーセンティシティ、歴史、地域活性化、産学官連携

*本学経済学部講師

1 鹿児島音楽祭のオーセンティシティ獲得過程については、定藤博子（2019）「霧島国際音楽祭の誕生と成長—産・官・民の地域イベントへの参加—」『地域総合研究』第46巻第2号55-65頁を参照されたい。

2 『鹿児島短期大学25周年記念誌』57頁。

楽社会学を専攻し、大学院博士課程修了、1970年からウィーン大学に留学経験がある。

②津曲学園鹿児島短期大学音楽科設立の経緯

鹿児島短期大学は鹿児島経済大学と共に津曲学園の下に置かれた私立大学である。鹿児島経済大学の前身は、昭和7年に設立した鹿児島高等商業学校だが、昭和35年4月に鹿児島経済大学となり、その後、他学部新設を経て、平成12年に鹿児島国際大学となった。以下に見る鹿児島短期大学は、昭和42年に開設後、平成13年から鹿児島国際大学短期大学部になったが、平成26年短期大学部は廃止され、鹿児島国際大学に統合された。

鹿児島短期大学が設立された昭和42年度は「高等学校卒業生の急増に伴い公私立大学の乱立が予想されていたので、文部省は大学・短期大学の認可基準に従来に比して極めて厳重な条件を附加することを決定していた。」(『鹿児島短期大学20周年記念資料集』92頁より引用) によって、鹿児島短期大学の設立のためには、設備等はもちろん、学科のユニークさや教員の拡充及び教員の鹿児島居住が求められた³。

そのような状況の中、教養科に音楽科の併設が決定された。この決定には当時の津曲貞男理事長(以下、理事長)の以下の認識が大きな影響を及ぼしたようである。ちなみに、津曲学園は大正15年に設置認可のおりた鹿児島高等女学校専攻科を持っていた歴史があることから、短期女子大学にすることは既定していた。

南九州には音楽科をもった女子の短期大学がない。鹿児島はまだ音楽界が低調で地域的にも音楽文化の普及は後進的である。音楽の勉学を希望する学生は地理的にも経済的にも不自由かつ困難な県外の音楽大学を受験せざるを得ない不便な立地条件のもとに置かれている。こうした観点から考えれば、南九州の拠点である鹿児島の音楽文化を向上発展させるための尖兵としての役割を演ずる音楽専門の学科を併設することは重要な課題と思われる。(『鹿児島短期大学20周年記念資料集』93頁より引用)

そこで、41年3月に、理事長、鹿児島大学教育学部音楽科主任教授を定年退職した林幸光氏、鹿児島経済大学の専任講師(中国語)かつ事務局長併任の竹之内安巳氏が津曲学園鹿児島短期大学設立準備委員会を構成した。スタッフを入れても5名での運営スタートとなった⁴。

東京、文部省との綿密な連絡や教員についての情報収集を、鹿児島の教員やスタッフが行うのは、あまりにも非効率との判断から、理事長の決断を得て、昭和41年6月1日付で、野村三郎氏が津曲学園鹿児島短期大学設立準備委員会東京駐在員に着任した。野村氏はその後鹿児島短期大学長となる三木靖氏と共に、教養科教育課程作成の検討、原案作り等を行った⁵。

昭和42年、無事、鹿児島短期大学は開設された。学生定員が教養科80人、音楽科40人となっているが、42年度の学生数は教養科80人、音楽科82人と記録されている。ちなみに、卒業生はそれぞれ78人、81人である。

慈善音楽会は昭和42年12月20日に県文化センターで開演され、毎年行われた。教員定期演奏会は昭和49年から始まり、年に1回開かれた。

教育と演奏会活動により、当時の理事長の言葉にあった「鹿児島の音楽文化を向上発展させる」という目的の達成を目指した。

現在でも、鹿児島国際大学国際文化学部音楽学科は年間を通して多彩な演奏会を行うほか、講習会や講

3 『鹿児島短期大学20周年記念資料集』92-93頁。

4 『鹿児島短期大学20周年記念資料集』92-94頁。鹿児島国際大学 HP (<https://www.iuk.ac.jp/>) (令和2年2月16日最終確認)。

5 『鹿児島短期大学20周年記念資料集』97頁。

座を開き、鹿児島だけでなく、県内外でイベントを鹿児島国際大学主催で開催している。また、鹿児島国際音楽コンクール、こどもヴァイオリンコンクールを主催し、参加者の技術の向上や音楽文化の普及に寄与することを目指している。

③大学に求められる役割 高度で専門的な職業能力を有する人材の提供

鹿児島短期大学音楽科が設立されてから13年後、1980年に第1回霧島国際音楽祭が開かれた。野村氏が当時を振り返った文章を読んでも、鹿児島短期大学については書かれていない。当時の学内資料を探してみたが、1993年の8.6水害で、多くの資料が泥をかぶり、処分を余儀なくされたそうである。よって、一次資料の収集は断念せざるを得ず、鹿児島短期大学と野村氏と霧島国際音楽祭の関係については、今後の課題としたい。

上記の関係性は見いだせないものの、霧島国際音楽祭と鹿児島国際大学の関係は、講師の雇用によってつながっている。野村氏の存在自体がそうである。また、例えば、鹿児島短期大学音楽科を引き継ぐ鹿児島国際大学国際文化学部音楽学科のウーヴェ・ハイルマン教授は霧島国際音楽祭マスタークラスの講師を務めたこともある。2019年には同学科の伊藤綾准教授が霧島国際音楽祭のプレセミナー講師を務めた。

このように見ると、大学に求められた役割は高度で専門的な音楽の知識や演奏方法を持つ人材の提供であった。野村氏の持つ音楽の知識、ウィーン留学での経験、東京での音楽関係者の人脈が、そして郷土愛が霧島国際音楽祭を誕生させた。その後、ハイルマン教授や伊藤綾准教授がその専門性から講師として霧島国際音楽祭に参加した。

大学はただ若者や教員がいる場ではない。社会から大学に期待され、かつ応じるべき役割は、このような学術的専門性が高く、専門的な知識や、より高度な論理的思考力の向上のための教育能力を持つ研究者の提供やそのネットワークの構築ではないだろうか。

3 大学生と地域イベントの関わり方

①入来麓武家屋敷群でのフィールドワーク

本研究テーマに沿って、定藤ゼミでは2018年度より2年間入来麓武家屋敷群にてフィールドワークを行った。その成果の一部は2019年7月開催の研究会で披露し、「2019年度第1回研究会「記憶と記録と（地元学の視点から）」⁶にまとめた。

入来麓武家屋敷群は鹿児島県薩摩川内市入来町にある。麓とは武家屋敷群があったところである。麓の特徴は川と山に挟まれた中に武家屋敷があることである。入来麓の場合は、清色川と清色城跡のある山城に、御仮屋や武家屋敷が囲まれており、まさに麓に特徴的な配置といえる。2003年に入来麓武家屋敷群は重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）に認定され、2019年には日本遺産に認定された。

ここでは、伝建地区の景観を生かしながら、旧増田邸という武家屋敷を中心に、年間を通して様々なイベントが行われる。また、小学生による観光ガイドや児童クラブの活動を通して、次世代に入来

写真1 サムライツウリズム体験
筆者撮影

6 定藤博子（2019）「2019年度第1回研究会「記憶と記録と（地元学の視点から）」『地域総合研究』第47巻第1号67-72頁。

麓の魅力を伝える活動にも積極的に取り組んでいる。観光の面では、薩摩川内市に甲冑製造企業の丸武があることから、「サムライツーリズム」を展開している。これは、観光客が鎧兜や着物をレンタルし、その場で着て武家屋敷を歩くことができるサービスである。

薩摩川内市は2004年に東郷町、樋脇町、入来町、祁答院町、上甑村、下甑村、里村、鹿島村が合併して誕生した。薩摩半島だけでなく、甑島も含む多様な地域を内包している。その薩摩川内市の人口推移は以下のとおりである。(図1参照。)

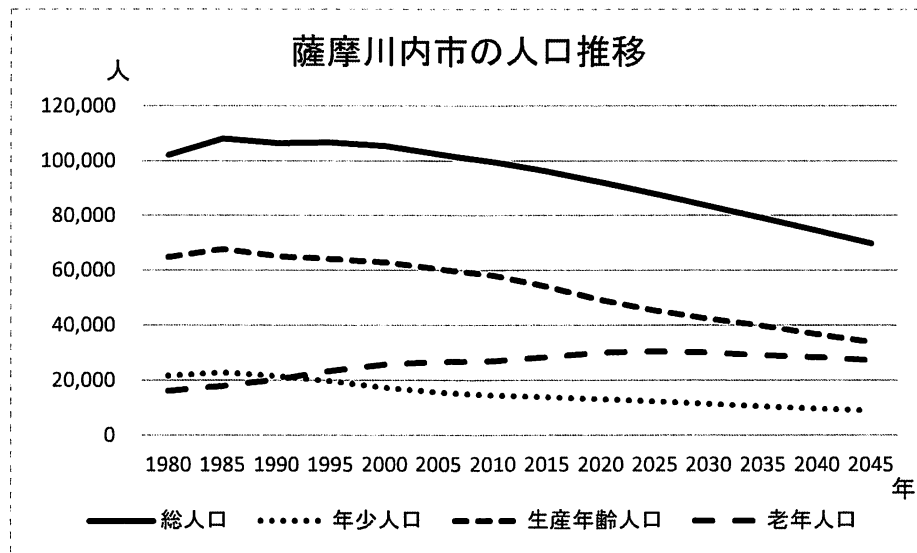


図1 薩摩川内市の人口推移

出所：RESAS（地域経済分析システム <https://resas.go.jp/>）（2020年2月16日最終確認）より筆者作成。

総人口は1985年をピークに減少しているが、2020年時点で生産年齢人口はわずかであるが、増加がみられる。これには、薩摩川内原発の影響もあろう。

入来麓武家屋敷群でのフィールドワークの目的は、オーセンティシティがあったはずのイベント（年中行事）が人口減少の中でどのような変化を遂げているのかを調査するためである。定藤ゼミでは、この調査のため、2018年度は入来麓武家屋敷群での活性化についての取組を調査し、2019年度に取り組む課題を設定した。そして、2019年3月からは、1年間さまざまなイベントに参加し、運営方法について調査した。

この調査の傍ら、地元の方との話の中で、学生主体の入来麓武家屋敷群活性化案提案の要請があり、上記調査の傍ら、学生自身の提案を作成した。

②イベントの変容の調査

参加したイベントは、1、かえんそや（ひな祭り）、2、梅日和（梅狩り）、3、てっさ（手戦）、4、すす払い（年末の大掃除）と餅つきである。

調査1 かえんそや（ひな祭り）

ひな祭りには、各家庭で五段のひな人形を飾る風習があったが、高齢者家庭では体力的に難しかったり、女兒がない場合には飾る理由がなかったりする。これにより、ひな祭りの風習の存続が難しい場合もあった。

そこで、現在ではひな祭りの時期に、旧増田家住宅で4、5セットのひな人形を一堂に飾り、一般の観光客が見られるように開放している。また、「かえんそや」や女性に対して着物のレンタルと着付けを行

い、ひな祭りの雰囲気盛り上げている。「かえんそや」とは、着物で着飾った女兒たちが「かえんそや」と言いながら、重箱に入ったお菓子を交換するという行事である。「かえんそや」は「替えましょう」「交換しましょう」の意味である。旧増田家住宅で行われるので、武家屋敷を背景にした華やかなイベントになっている。

調査2 梅日和（梅狩り）

梅日和、梅仕事など、言い方はさまざまにあるが、梅の実が熟す頃に、梅を洗い、あくを抜き、ヘタを取り、梅干しや梅酒にする作業は各家庭で行われてきた。

入来麓武家屋敷群には神社の他、個人宅に梅の木があることが少なくない。しかし近年では、この梅をちぎる作業が高齢者にとって負担となっていた。しかし、梅の実をちぎらずに放っておけば、熟して、地面や道路に落下し、それが道を汚す原因となっていた。

そこで「梅日和」と称して、梅狩りと梅干づくりの体験ができるイベントが実行されている。梅の木をゆすって梅の実を落とし、それを拾ったり、すでに集められ水にさらされた梅の実で梅干づくりをするなど、子どもから大人まで楽しめるよう工夫されていた。

調査3 てっさ（手戦）

50年ほど前までは、お盆の3日間、麓の2,3歳から20歳くらいまでの少年たちが夜通し鬼ごっこをする遊びがあった。麓の神社や墓場、民家、川を舞台に行われた。少年たちは、2組に分かれ、^{てがたき}手刀で切られたら負けになる。

いつの頃からか行われなくなったが、現在、入来麓の方々がその再興に取り組んでいる。ただ、安全面や性差別への配慮から、夏休み期間中に1日てっさ（手戦）をする日を設け、児童クラブ等に所属する子どもたちが参加する。熱中症対策として、できるだけ気温の低い午前中に行われる。

例年は、入来麓の高齢者の方々と児童クラブのメンバーで行われていた。2019年度はそこに大学生が入ることで、子どもたちもいつもに増して本気でてっさ（手戦）を行ったようである。また、高齢者の方々も、飛び跳ねたり走ったりするなど、大学生と共に楽しんでいらしたと聞いている。

調査4 すす払いと餅つき

伝統的な茅葺屋根の掃除方法は、長い竹の生木をはたきの代わりに使い、梁や天井にたまったすすを掃う。落ちてきたすすやほこりはほうきで掃き、処分する。

入来麓の家々は、瓦屋根が多い。また、さまざまな掃除道具があるため、この方法を利用するメリットは少ない。しかしながら、伝統的な家屋をモデルに、伝統的な掃除方法を体験するのは、文章で読む以上に、家の構造の理解の助けになった。

すす払いと餅つきの間には、地元の方々による人形芝居やしめ縄作りが披露された。人形芝居をする方々は、入来麓での楽しい思い出を一つでも増やし、それが入来麓の魅力になることを目指していらっしやう。一方、しめ縄は藁から素手で作られていたが、その技術はもう引き継がれていないという。

以上のように、伝統的な季節の行事を各家庭で行うことが難しくなっている状況において、それを担う組織が、伝建地区保存会や児童クラブといった地縁集団である。入来麓の場合、宗教的祭祀には関わらず、ある一定の人数を組織化し、伝統行事をマネジメントしながら、社会的課題の解決につながると同時に関連人口の増加にも役立つようなイベントを企画・運営している。

③学生による企画案

入来麓の伝建地区保存会会長の長坂正雄氏と話す中で、学生自身も上記のような企画・運営に興味を持ち、企画案の作成を行った。

学生たちから見た入来麓の魅力は、武家屋敷ではなく、山城であった。その理由は、武家屋敷群という言葉のイメージほど武家屋敷が残っているように見えない、ということであった。たしかに、中世から存続する麓である入来麓は、それより新しい時代の知覧武家屋敷群ほど武家屋敷がまとまって存在していない。立派な武家門は存在するので、そこはフォトジェニックであるが、麓全体としては空き家や更地もある。よく見れば、石垣が入来麓武家屋敷群の魅力になるのだが、一見しただけではその魅力はわかりにくい。

このような気付きを得た後に、学生たちが注目した場所が山城であった。山城といっても城はなく、山城跡という方が正確である。(習慣的に山城と呼ばれる。)切り立った空堀跡から始まるこの山城は、敵の侵入を防ぐため、わざと入り組んだ進みにくい作りになっている。安全のためのロープは張られているが、張り巡らされているわけでもない。大学生が見て、深くも高くもない山城跡であるので、基本的に自己責任で解決できる規模であるように思われる。

定藤ゼミ1期生(3年生)の学生たちはこの山城の活用案を以下の通り提案した。

現状と課題：山城の魅力は、入りやすい点、舗装があまりされておらず自然を感じられる点である。特に史跡をつなぐ道が魅力的であるが、現状では、歴史的価値が分かりにくい。

解決策：山城を子供の教育の場とし、自然を通して、歴史を学ぶきっかけ作りの場所にする。人間の成長にとって、幼少期の体験は重要であると考えられる。特に、自然の中にいると楽しさ、危険など、さまざまなことに意識をむけるため、自分の好きなものを見つける感性を養うことができる。小さい頃遊んだ思い出は覚えているものであり、子供の頃に気がつかなかった事を大きくなって知った時に故郷を誇りに思えるようになることを期待する。

1期生に対し、2期生は入来麓に行った回数も少なく、1期生ほど入来麓の方々とコミュニケーションをとる機会がなかった。しかし、入来麓の観光案内所等で売る特産品として、2期生の活動から、入来麓の特産物となるキャンドルを提案したい。

現状と課題：入来麓のお土産など、入来麓で消費活動をするのがなかった。

解決策：入来麓の魅力がわかるようなキャンドルを作り、販売する。例えば、薩摩川内市の養蜂農家で作られた蜜蝋と市の名産の柑橘類や植物を使ったキャンドルである。観光案内所に置くだけでなく、SNSでも発信する。これにより、商品を通して、入来麓武家屋敷群の魅力を知ってもらう。また、鹿児島市内でのマルシェ等での販売を通して、入来麓の魅力を伝える。

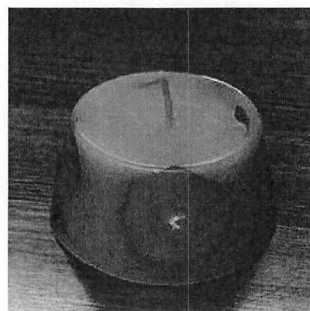


写真2 歴史と風土を生かしたキャンドル

筆者作成・撮影

4 まとめにかえて

以上、2年間にわたり、オーセンティシティを中心にイベントのあり方について、研究を行った。

昨年の論文では、霧島国際音楽祭のオーセンティシティの獲得について明らかにした。オーセンティシティがなかったクラシック音楽の音楽祭が、産官民の開催への望みと協力により、オーセンティシティが確立され、40年以上も発展しながら継続するイベントとなったのである。

本年は、そこに学、すなわち大学がどのように関わったのかを明らかにしたかったが、資料的制約から、それには至らなかった。ただ、大学と地域がどのように関わったのかの事例をいくつか明らかにすることができた。これによると、学術的専門性が高く、専門的な知識やより高度な論理的思考力の向上のための教育能力を持つ研究者の提供が、大学に期待されていたことが判明した。

霧島国際音楽祭については、今後、鹿児島県民の文化水準の向上だけでなく、当初の目的に立ち戻り、鹿児島の観光資源とすべく、今後の展開が期待される。

オーセンティシティの獲得に対し、喪失事例として入来麓武家屋敷群の調査を進めた。こちらも資料的制約があり、文献調査等には至らなかった。

しかし、フィールドワークでの調査からは、オーセンティシティが認められる年中行事は、実行者が家庭から地縁集団という組織に替わりながら続けられていることが明らかになった。また、一度、行われなくなった行事でも、記憶や記録で残されていれば、様式やルールを変えて、再度行われるようになる事例も確認された。

学生の活性化案も、歴史や風土に根差したもの、もしくはそれらを新しい視点や方法で活用する案であった。つまり、歴史や風土の魅力は失われるどころか、再度発見され、さらに発信される可能性さえ含んでいるのである。

2年間、霧島音楽祭研究や学生とのフィールドワークを通して、学生や市民が歴史をどのようにとらえ、それをどのように利用するのか、その過程で、どのように記憶と記録がつくられるのか、について考察を深めることができた。

5 謝辞

本研究にあたり、快くご協力くださいました霧島国際音楽ホール（みやまコンセール）増森健一郎様、五代香織様はじめ霧島国際音楽祭関係者の皆様、入来麓伝統的建造物群保存地区保存会会長長坂正雄氏、入来麓武家屋敷群の皆様、鹿児島国際大学事務局次長・産学官地域連携センター次長大迫宗昭氏に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は平成30・令和元年度鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同研究プロジェクトの研究助成を受けて実施したものである。

参考文献・資料・ホームページ一覧

1. 定藤博子（2019）「霧島国際音楽祭の誕生と成長—産・官・民の地域イベントへの参加—」『地域総合研究』第46巻第2号、55-65頁。
2. 定藤博子（2019）「2019年度第1回研究会「記憶と記録と（地元学の視点から）」」『地域総合研究』第47巻第1号、67-72頁。
3. 鹿児島短期大学『鹿児島短期大学25周年記念誌』1994年
4. 鹿児島短期大学『鹿児島短期大学20周年記念資料集』1988年

5. RESAS (地域経済分析システム <https://resas.go.jp/>)
6. 鹿児島国際大学ホームページ (<https://www.iuk.ac.jp/>)